

ケアマネ マイスター広島

TALK RELAY



vol.5

平成26年度
ケアマネマイスター広島
IGL パルシャレー施設群
ケアハウスふれ愛
介護老人保健施設ベルローゼ

河野 隆典

Kono Takanori

広島市に在籍している平成 26 年度認定のケアマネマイスターの河野です。

現在は、介護支援専門員という実務から少し離れ、高齢者複合施設の責任者として、各事業が健全な運営を行えるように方針や対策を主な業務として働いています。

最近の話題といえば、業界を問わず新型コロナウイルス関連の話題に尽きませんね。話題の中心は、利用者や職員の体調やワクチン接種、PCR 検査などの感染対策のことでです。

もちろん、最優先は命を護ることであり、次には事業継続が要介護者等の支援には重要であるため、この対応に日々追われているのが現状ですね。

しかし、介護支援専門員の業務「ケアマネジメント」においては、コロナ禍におけるコミュニケーションの阻害は最も大きな課題であると思います。

研修や会議はオンライン等での実施が徐々に進み変化していますが、要介護者等との面談では、どうでしょう？コロナ対策で面談条件は厳しく、マスク着用、ソーシャルディスタンス、短時間での面談となっていますよね。

介護支援専門員の皆さんは、この面談について、どのような工夫を凝らしていますか？私は、この執筆を行うまでは、事業所としての感染対策や利用者や職員の体調管理にばかりに気を取られてしまう状況で、このコミュニケーション阻害に対する対策が不十分であることに気づかされました。

思い返せばコロナ禍当初は、支援者側のコミュニケーションは、「明瞭で大きな発声すること」と「マスクで隠れていてもしっかりと自身の感情を顔の表情に現すこと」、「会話では無駄な言葉を省きシンプルに伝えること」を実践するように頻繁に発信していましたが、今ではなんとなく慣れて面談時の工夫を忘れてしまっています。

未だ収束の見えないコロナ禍でのコミュニケーションは、真の意味でのアドボカシーを含めた意思疎通の方法を生み出すことができると信じて、創意工夫を続けなければならないと思います。

さて、次は中東マイスターへバトンを渡します。



◀ IGL パルシャレー 3階受付 ここでお客様をお出迎えしています